

発達性読み書き障害(ディスレクシア)の評価と指導

——科学的知見に基づいた支援の検討——

奥村 智人

1. 発達性読み書き障害 (Developmental Dyslexia) とは

読み障害の一種にディスレクシアと呼ばれるものがある。一般的にはディスレクシアと呼ばれることが多いが、後天性の読み障害である失読症と区別して、発達性ディスレクシアと表現されることがある。また、読むことに問題があると、ほとんどの場合、書くことにも問題を伴うため、発達性ディスレクシアと同じ意味で、発達性読み書き障害という用語が用いられるようになっている(宇野, 2002)。発達性読み書き障害は、学習障害の中核と考えられており、「勝手読みや飛ばし読みが多い」「音読が非常にたどたどしく、読み書きに時間がかかる」「読めないことから、書字の習得も進まない」「読解が難しい」などの特性が表れる。国際ディスレクシア協会の定義では、「ディスレクシアは、神経生物学的原因に起因する特異的学習障害である。その特徴は、正確かつ(または)流暢な単語認識の困難さであり、綴りや文字記号音声化の拙劣さである。こうした困難さは、典型的には、言語の音韻的要素の障害によるものであり、しばしば他の認知能力からは予測できないものであり、また、通常の授業も効果的ではない。二次的には、結果的に読解の苦しさや読む機会が少なくなるという問題が生じ、それは語彙の発達や知識の増大を妨げるものとなり得る」と、記述されている(発達性ディスレクシア研究会ファクトシート参照)。発達性読み書き障害の出現率は、英語圏で6～15%の高頻度

を示す報告が多いが(Karsusic, 2001; Lyytinen, 2004)、日本では、平仮名1%、カタカナ2～3%、漢字5～6%と他の言語と比較すると出現頻度が低いと言われている(宇野彰, 2004)。しかし、知的障害やその他の読み書きに関わる問題が併存しているケースも含めると数は多くなると考えられ、発達性読み書き障害やその周辺の読み書きの問題への対応は特別支援教育の重要なテーマのひとつである。

2. 発達性読み書き障害の発生プロセス

発達性読み書き障害の音読の障害を考える際の代表的説明モデルとして、後天性の失読症で研究が進められている「二重経路モデル(Coltheart, 1993)」がある。二重経路モデルでは、①文字を規則に基づいて音韻に変換する経路と②語彙辞書を用いて単語をひとまとまりとして変換する経路があると考えられている。発達性読み書き障害では、主に①の経路が働きにくくなっており、その背景には音韻処理の障害があると考えられる。それに伴って、②の経路での単語のまとまり読みも育ちにくくなる。このような状態が音読のたどたどしさや読解の難しさにつながる。

3. 発達性読み書き障害の評価

二重経路モデルを基礎にして考えると、読みの障害を分析し、支援を検討する際、①の経路に関

わる音韻処理と②の経路に関わる意味処理が重要であると思われる。そのため、①の経路に関わる検査として、音韻操作課題やデコーディング（文字情報を音に変換する能力）、②の経路に関わる検査として、語彙の量や深さ、読みに語彙を活用してまとめ読みをするスキルについて確認する。具体的には、特異的発達障害診断・治療のための実践ガイドライン（稲垣，2010）、包括的領域別読み能力検査 CARD（奥村，2014）、絵画語彙テスト PVT-R（上野，2008）などがある。

実際の読みのつまずきでは、文法の理解が難しい、文章の意味の読み取りが難しいなど文・文章レベルの問題が発達性読み書き障害に合併しているケース、または、発達性読み書き障害がないが文・文章レベル問題があるケースも多く見られる。また、様々な書字の問題も伴うことが多い。これらの実情も踏まえ、実際の評価では、小学生の読み書きスクリーニング検査 STRAW（宇野，2006）、包括的領域別読み能力検査 CARD（奥村，2014）、小学生の読み書きの理解 URAWSS（河野，2013）などを用いて幅広い評価が求められる。

4. 発達性読み書き障害の支援

学校教育においては、発達性ディスレクシアに対する認知度が低く、特別な支援が受けられない現状が見受けられる。近年、RTI モデル（Response to Intervention：通常の学級において児童全員に効果的な指導を行い、その結果指導効果が得られなかった児童に対し特別な支援を行う教育的介入法）による学校教育での介入も試みられている（海津，2008；小枝，2014）。しかし、RTI モデルそのものは、読みに苦手さがある子どもの個々の特性を捉え、支援を検討するものではない。また、日本語における発達性読み書き障害の認知的特性に応じた支援法や教材の開発も試みられている（川崎，2005；春原，2005；村井，2010）。しかし、教育現場における体系化や一般化には至っていない。今後は、発達性読み書き障害を含め、学習上のつまずきの要因を類型化し、それぞれのタ

イプに合った効果的な支援法の検討と教育現場における活用が求められる。

【文献】

宇野彰（2002）：発達性読み書き障害－神経心理学のおよび認知神経学的分析－。失語症研究，22（2），130-136。

奥村智人，川崎聡大，西岡有香他（2014）：包括的領域別読み能力検査 CARD ガイドブック。株式会社ウィードプランニング。

宇野 彰，春原則子，金子真人他（2006）：小学生の読み書きスクリーニング検査-発達性読み書き障害（発達性 dyslexia）検出のために-。インテルナ出版。

宇野 彰，春原則子，金子真人他（2015）：発達性読み書き障害児を対象としたバイパス法を用いた仮名訓練—障害構造に即した訓練方法と効果および適応に関する症例シリーズ研究—。音声言語医学，56，171-179。

発達性ディスレクシア研究会ファクトシート <http://square.umin.ac.jp/dyslexia/factsheet.html>

Lyytinen,H., et al. (2004): The Development of Children at Familial Risk for Dyslexia: Birth to Early Scholl Age, Annals of Dyslexia, 54(2): 184-220

Karsusic,S.K., et al. (2001): Incidence of reading disability in a population-based cohort, 1976-1982. Mayo Clinic Proceeding, 76(11): 1081-1092

宇野 彰（2004）：発達性 Dyslexia, Japanese Journal of Cognitive Neuroscience, 6(2), 36

Coltheart,M., Curtis,B., Atkins,P., Haller,M. (1993): Models of reading aloud: Dual-route and parallel distributed-processing approaches, Psychological Review, 100 : 589-608

春原則子，宇野 彰，金子真人（2005）：発達性読み書き障害児における実験的漢字書字訓練—認知機能特性に基づいた訓練方法の効果—。音声

言語医学, 46(1), 10-15.

川崎聡大, 宇野 彰 (2005): 発達性読み書き障害児1例の漢字書字訓練, 小児の精神と神経, 45:177-181.

村井敏宏 (2010): 読み書きが苦手な子どもへの〈基礎〉トレーニングワーク (通常の学級でやさしい学び支援 1巻), 明治図書

上野 一彦, 名越 斉子, 小貫 悟 (2008): 絵画語彙テスト (PVT-R), 日本文化科学社

河野俊寛, 平林ルミ, 中邑賢龍 (2013): 小学生の読み書きの理解 URAWSS, こころのリソースブック出版会

小枝達也, 関あゆみ, 田中大介, 他 (2014): RTI (response to intervention) を導入した特異的読字障害の早期発見と早期治療に関するコホート研究. 脳と発達, 46:270-274

特異的発達障害の臨床診断と治療指針作成に関する研究チーム編 (編集代表: 稲垣真澄) (2010). 特異的発達障害診断・治療のための実践ガイドライン. 診断と治療社

海津重希子, 田沼実敏, 平木こゆみ, 他 (2008): 通常の学級における多層指導モデル (MIM) の効果 - 小学1年生に対する特殊音節表記の読み書きの指導を通じて -. 教育心理学研究, 56:534-547

奥村智人 (おくむら ともひと)
大阪医科大学 LD センター
オプトメトリスト